

---

# ファンタジーワールド番外編 - とある男女のバレンタインな日 -

ビークル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファンタジーワールド番外編 - とある男女のバレンタインな日 -

### 【Nコード】

N8214G

### 【作者名】

ビークル

### 【あらすじ】

妄想が激しく家庭的な一般男子高生Rは同じクラスの上口に恋をする。しかし、上口には壮大な秘密が……。ファンタジーワールド番外編。

## 第一話 とあるだめだめ男子高生の恋

バレンタインデー：女が男にチョコを渡す日

ホワイトデー：男が女にお菓子をお返しをする日

――2月12日 放課後 自宅――

なんと言うことだ。

男だつて恋愛は自由！そうだろ、エブリワン？

なのにさ、返しただけって何よ？男女平等はどこに行った？

クリスマスを逃した今、席にも恵まれず、部活も違う俺は来年も同じクラスの可能性が極わずかな同級生に恋している俺のチャンスはこの2日以外にない。

しかしだ。

バレンタインにチョコを渡すのも…誰かに見られたら、逆じゃね？って突っ込まれそうで嫌だ。本人に突っ込まれたらもつと嫌だ。

しかし、ホワイトデーに先延ばしにするのもナンセンスだ。ツイチャンスしかないのにワンチャンス潰すのも…。

俺はとある高校生。名は無い、なんていうことはないが、そうだな…、高校生R君ということにしておいてくれ。

そんな俺の特徴といえば、野球をやっている。野球部に入ってたすら練習をしてる普通の男子高生だ。

しかし、レギュラーには程遠い。なんせベンチを含めシヨートのポジションの枠は2、3人しかないというのに、シヨートの選手が5人もいるからだ。

一見すると、簡単そうに見えるが、一人はスター選手で決定して

いるため、4人で1、2の枠を争う。きつい。

そうだ、脱線してしまった。

後は…そうだな。両親が共働きで弟と妹がいるおかげで、面倒見はいいほうだと自負している。

料理も出来るし、家事も少しはできる。出来た男なんだぜ？

勉強は…、数学だけは苦手なんだ。それだけは勘弁してほしい。

あとは燃えやすく負けず嫌いだ。試合とか絶対負けたくないし、勝負のときは周りなんか見えてない。

そのせいで、負けた試合も多々あるが…、簡単には変えられないだろう。

とまあ、そんな俺の紹介だ。

そして、ラプターゲットこと、俺の惚れた相手というのは同じくラスの『上口奈央』という名前だ。

体が小さくて、その体と同じように性格は控えめだ。おっと、俺はロリコンじゃないぜ？

小動物…リスとかを連想させるやつで、なんというか、見てると癒される。

頑張り屋で、何事も一生懸命に取り組んでる。それも惚れ要素だ。気が利いて頼みごとをされると断りきれない性格な為か、よくパシリにされる。そこは納得いかない。

主にクラスの女子と美術部の人だ。いつかはガツンと言ってやらないうと。

そうだ。上口さんは美術部なんだ。

上口さんの描く絵は美しいというよりはかわいらしくて、非常に癒される絵ばかりだ。

まあ、直接見に行く勇氣はないから、たまたま通るときにチラッと見るだけだな。

さて、話を戻すでしょう。

告白を何も無い日にやる、なんて勇氣は俺には無い。

席替え：から始まり、体育祭、野球部の練習試合、文化祭、球技大会、合唱際、クリスマス…と恋愛絡みのイベントは順々に過ぎ去っていき、残りはバレンタインデーとホワイトデーのみ。

そう、次のバレンタイン（明後日）はセミアイナルチャンスと  
いいいい。

このチャンスを逃すわけにはいかない。…いかないのだが…。

ぶっちゃけどうするよ？

うちの学校の放課後は夜8時ごろだ。

いや、授業自体は3時半には終わるのでそんなことはないのだが、  
なんせうちに帰宅部は存在しない。

部活無所属も図書館で勉強しているからだ。

そんなわけでうちの学校は死角を見つけるのは不可能といえる。

体育館裏？バスケ部の溜まり場だ。

林？グラウンドを横切るところをサッカー部か野球部に見られて後  
をつけられる。

屋上？隣の吹奏楽部とPC部ヨタクに気づかれる。

プール？お、いいんじゃない？だって今冬真っ盛りで、水泳部は屋  
内プールに出張か、筋トレだしな。

さて、場所は決まった。しかし、何をするのか決めなければなら  
ない。

そういえば、世間では 逆チヨコ が流行ってんだっとな。

俺も乗っかるべきか？

はい

いいえ

やっぱりだめだろ。他のやつらと同じって敗北感を感じる。  
そうだ。俺の魅力を最大限に引き出しつつ、他のやつらには出来ないことをするんだ。

…1時間後。

無理。

だってさ、バレンタインにやるのはいいのにチョコじゃないって  
どうよ？

女の子は…いや、男もか。甘いのは好きだしなあ。

おっ、そうだ！これじゃね？

「あ、来てくれたんだ？」

「う、うん」

「悪いね、こんなところに来てもらって」

「いや、気にしないで。…それで、なんのご用かな？」

「あのさ…俺…手袋編んでみたんだけどさ。受け取ってもらえるかな？」

そして俺は、ピンク色のねこ手袋を手渡す。

「えとう……………。にゃあ？」

「ぐはっ！（か、かわいい）」

バタンッ

「え？R君！？」

ピーポーピーポー

「妄想の俺！鼻血出して気絶してどろする！そして上口さん！似合  
いすぎる！」

「にいちゃんうるさい！」

「お、わりい」

そんな（自称）野球部ショート補欠料理完璧家事ちよい出来面倒  
見いい（変態）男の一日。

その彼はその日、徹夜をして、ピンク色のねこ手袋（肉球内蔵）  
を編んだという。

## 第二話 突然の告白、答えは当然ノ

――2月13日 8時20分 2-4教室――

「上口さん、ちょっといい？」

「え？ なんですか？」

徹夜でプリティーでキュートなキューピットウェアムう）  
要はねこ手袋です）を完成させ、そのまま部活へ。

目の下に黒いくぼみを発生させた俺は、見事に朝練から速攻ではずされた。

ひどくね？

そんなに俺が邪魔かよ！

いやまあ、間違つてないけど。

そして、勤勉な上口さん（だけ！これ重要！）は毎朝HR開始30分も前に教室に来て勉強をしているのだ！

俺はその情報を、あるルートから入手した。ん？企業秘密だよ。教えるわけねえだろ？

そして今日は13日だ。

14日なら婦女子共が朝早くから誰かを待ち伏せしていて、偶然俺が上口さんを誘うところを聞かれる可能性があるが、前日なら起こりえるはずもない。

そう思い、声をかけてみた。

ふっふっふっ、これでもれる心配要素は一つ減ったぜ…。

「出来れば、明日の昼休みにプールに来てもらえないかな？」

「え？ プール？」

し、しまった。やはり季節はずれか？ もっといいシチュがよかつたよなあ。

ええい。何とでもなりやがれ！

「それつてもしかして…告白してくれる、とかかな？」

「いやあ、まあ、そうなんだけどさ…。アハハハハ」

一瞬で看破しないでよ！上口さん、頭良すぎだよ！

「わたし…、付き合つとかそういうの考えられないんだ」

「え？」

ふ・ら・れ・た、だと？

「だから…、その…、ごめんなさいっ」

大佐！ご報告いたしますっ！

どうした？任務は無事遂行したんだろ？

いえ、その…

なんだ？私は忙しいのだ。さつさと報告したまえ。

はっ、残念ながら任務失敗しました！





え？

理性が動きを停止しても、生存本能ががんばっていらっしやっいて、ギリギリ避けた。

しかし、耳をかすった。

「っ！」

刺すような痛みが耳に残る。

暖かいものがゆっくりと落ちる。

血？

「クロスから」

殺気。

はじめて向けられた。

ドラマなんかの、映画なんかの比じゃない。本物の殺気だ。

でも、俺はその殺気に対する恐怖は抱かなかったし、シャーペン  
を壊された怒りもなかった。

代わりに湧いたのは 救ってやりたい って気持ちだった。

「ちょっと、外出してくるわ。バッグ漁らないでよ？」

もう後ろ姿で見えないが、最後にその少女の瞳は確かに、

悲しみと孤独に震えていた。

「あ、漁るわけないだろ？ここでもお俺は無犯罪者歴17年なんだよ」

「……………」

俺も声と膝が震えていた。

「くっそ、シャーペンとれねえ。なんでコンクリの壁にシャーペンが刺さるんだよ」

壁に刺さっているシャーペンの回収にたっぷり5分もかけている姿を、少年は教室で多々目撃された。

### 第三話 幼馴染の見解

――2月13日 放課後 2-4教室――

もう、終わったのか。

なんか、朝のお誘い（告白になっちゃったけど）から一気に夕方になった感じだ。

今日はずっと上口さんのことを考えていた。

あの時から後の上口さんはいつもどおりの上口さんだ。

どこか控えめで、いつもニコニコしていて、誰かに気を利かせて、皆を和ませて、パシリにされて…。

でも、その上口さんは本当の姿なのだろうか？

上口さんが俺のシャーペンを平気で折った。

上口さんは俺に殺気を向けた。

上口さんはあんな悲しいそうな顔をしていた。

上口さんは実は怪力だった。（実はまだシャーペンの事を根に持っている小さい男）

俺は…、上口さんの何を知っているんだろうか？

朝の上口さんが本当の姿なら、俺は皆より一歩、上口さんに近づいたのだろうか？

「何、魂抜けたような顔してんだよ。そりゃ、振られたのはシヨッ

くだろっけどさ」

振り返ってみると見慣れた顔がこちらを見ている。  
茜だ。

中3までは(俺の)彼女候補ランキング第一位だった彼女(参加者一人)だが、上口さんが加わることで2位へと転落した、しかし、上口さんに振られたことによって再び1位に再浮上した…って何やってるんだ俺は。

「はぁ。これだから乙女心の分かってない年配者は…」

「キモッ。いいおっさんが乙女語ってるよ」

くっ、正論なだけに言い返せない。  
おっさんではないが。

「んで、何しに来た？俺はこっに見えて忙しいんだが」

「は？サボリが何いってんの？」

「サ…ボリ？」

「あん？自覚ないの？野球部の顧問が探してるよ」

「野球部…野球部…。アア!？」

「本気で忘れてたんだな…」

そういえば、部活忘れてた。  
流石に朝練と夕練を連チャンでサボるのはやばい。いや、朝練はサボリではないが。

「そんなならやめときな」

「…そうだな」

ぶっちゃけ、今はどうでも良かった。

「で、何しに来たわけ？」

「野球部の顧問が探してるから探してやってたのよ。  
まあだけど…今はあなたの相談相手？」

「はっ、恋愛経験皆無のオバハンに今更…」

「一つ、いいことを教えてやろう。あたしの火山って活性火山なんだよ？」

「い、イエッサー」

純粹に怖かった。

柔道部だけに滅茶怖かった。

「ま、話したいなら何でも話しな。聞いてやる」

やっと、コイツの本題…いや、俺の本題か。に入った。もっとも脱線させてたのは俺だが。

「なあ、茜」

「ん？」

「人間って裏表ってあんのかな？」

「…なんか運動部らしい、質問ね」

「アアン？」

「いや、運動部って裏表を使い分けて出し惜しみしてるやつなんか生き残れないでしょ？」

だから、クラスとかの人間関係で苦労するんだよね…」

喧嘩腰に返事を返したのに、きれいにかわされた。

…もしかして、今ならちょっとぐらい強気に出ても切れないのでは？

「いかにもオバハンチックなぐはっ」

なぜか右ストレートを入れられた。

お前、空手部じゃなくて、柔道部なんだろ？投げ技にしるよ。

いや、投げられたら投げられたで嫌だけどさ。

ちなみに俺は茜にオバハンを連呼しているが、立派な同じ年では

ある。

「次言ったら、絶縁だからね」

「アイサー」

そう言っつて睨んでくる茜。

絶交ではなく絶縁という言葉を選ぶ辺り、本気さが知れる。

「で、人間に裏表があるかってことだったっけ。上口のこと？」

「まあ、強いて言えばな」

出来れば友人とかいろいろと聞いておきたいが、今この場合において、他人の情報はそれほど重要じゃない。

「上口は…あんまり会わないから確かじゃないけど、いつでも本音で生きてる人だと思う」

「して、根拠は？」

「あの子って人が良すぎるでしょ。ああいうのって打算とか計算とかでやるもんでもないよ。」

そういうのって自分の嫌な頼みとか断るだろうけど、あの子はパシリも律儀にやるからねえ」

「じゃあ、朝のも本音なのかなあ」

「朝の？」

「上口さん…、俺のシャーペンを折ったとき…、シャーペンを俺に投げたとき…、悲しそうな顔をしてんだ。」

「見間違いで何もでもない。でも普段の上口さんからは想像もつかない顔だったな。いや行動とか言動もそうだったけど…」

「ふうん、シャーペンを折ったり、投げたり、悲しい顔をしたり…。確かに普段の彼女からは想像もできないわね。」

「でも、彼女の性格は何となく分かってきた」

「何？」

「彼女は寂しがりやよ」

「寂しがり？ まあ、いつも誰かと一緒にいるけどさあ、特に親しいっていう人は見たことも聞いたことないんだけど」

「上口は相当難儀な性格をしてるわ。」

「寂しいから誰かの傍にいたい、だけど、他人を信用できない。」

「その2つの矛盾が重なり合ったのが彼女なのよ」

「寂しいのに、他人を信用できない…。」

「じゃあ、いつも誰かと一緒にいるから寂しがり、でも親しい人がいないから他人を信用してない、っていいいの？」

「まあ、そんなところね」

「へ〜」

全く、茜のやつ。驚くほどの推理力だ。

情報は俺ほど持ってない（といっても俺も大してないが）のに、俺よりも彼女のことを正確に割り出している。

俺もちやんと勉強してれば、こんな頭になつたのか？

いや、茜は茜で、俺は俺だろ。俺には俺のよさがある。

野球とか野球とか野球とか野球とか料理とか裁縫とか。ダメだ。野球ばっかだ。そしてその俺のよさは他人に負けている。

「上口さんと付き合うなら100%愛をささげて、傷ついてもひたすら前進するしかないわよ？

それでも付き合いたいのか？」

どうなんだろう？

俺が彼女に惚れた理由は、1に小動物っぽくて癒される、2に頑張り屋で癒される、3に絵もかわいらしくて癒される、だからなあ。癒されるばっか。俺、癒しを求めているのかな。

そうだ、気も利くし、優しいし…、朝のは…、まあ仕方ないさ。

他人が信用できないのに、その他人から付き合いおうなんていわれなくてもな。

「付き合いたいね。上口さんはそのデメリットに有り余って、いい部分がありすぎる」

「…………、そう」

「サンキューな、茜」

「ああ、それと二つ言っておく。今、上口に会って来い」

「あ？まあ、会いに行く予定だったけど、なんで？」

「それは自分で確かめることだ。もう一つ、彼女はかなり暗い闇を  
持つてる。人を信用できないほどの、な」

「ああ」

「だから、お前はその闇を受け入れる、そしてその趣旨を上口に伝  
えてやれ。

おそらく一途なやつだ。最初に惚れたやつに一生ついていくやつ  
だと思っよ」

「ああ、アドバイスありがとう。行ってくる」

「行ってらっしゃい」

「振られちゃった……」

幼馴染が必ず結ばれる、それは都市伝説だ。

そんなこと幼馴染がいる人は皆知っている。知っていても私はやっぱりアイツが好きだった。

アイツが上口に出会う前に私がさっさと告白していれば、結ばれたのだろうか？

いや、考える必要はない。2人はもう出会ってしまったのだから。これで位置づけははっきりしてしまった。私はこのままアイツの幼馴染。

「……つつ……えぐつつ……つつ……」

昨日までは、バレンタインの日のことを考えていた。

毎年、本命をアイツにあげていた私だが、照れ隠しというかなんと言っかそれを本命といったことはなかった。

今年こそは、と毎年思ってはいるのだが、口が動けなくなるのだ。

しかし明日からは、いや、これまで通り、アイツの幼馴染を演じるのだ。

そうなるように、今だけは泣かせて。

「ごめん、茜。上口さんの居場所を知ってるかー、って茜？」

しかし、神様はいじわるだった。

## 第四話 幼馴染、涙の後押し

――2月13日 放課後 教室――

「ごめん、茜。上口さんの居場所知ってるかー、って茜？」

「……！」

えっ、ちよっ、マジ？

やべー、ちよーめずらしー。

「馬鹿あ。なんで…、なんで戻ってきたのよあ」

そこにいるのは強気な幼馴染、茜ではなかった。

そこにいたのはなみだ目な茜で、実際にはちよっとしゃっくりしたりして…、見た目かなり弱そうなやつだった。

いや、『弱そうに見える』だけなのであって、実際に闘ったら瞬殺されるだろうが。

「なんなんで、ってそりゃあおまえ、上口さんの居場所を知っ」

「知るか馬鹿あ……！」

「いっ、いっめさ」

確かに、茜の言葉は質問であって質問じゃなかった。答えた俺が

悪い。

だから、なみだ目でこっちを見るなって。  
対処に困るっての。

え？いい感じにテンパツてるって？

そりゃ当たり前だ。あいつの泣き顔なんて生まれてはじめてみた  
わ。

妹なら頭なでるだけでいいんだけど、この女に通じるのか？

っていつか泣いた原因って俺？

まあ、そりゃそうだよなあ。まだ、教室出てから数十秒しかたっ  
てないのにその中で何か起きたなんて考えられるわけがない。  
でも俺がしたことなんて恋愛相談ぐらいだしなあ…

ま

さ

か

？

「お前、まさか俺のことが好きだったなんていうんじゃないか…」

「! ! ぶあつかじゃないの? 誰があんたなんかを好きになるかって……」

否定はしてるんだけど、最初に驚いちゃった時点でそうだったんだなあって分かつちゃうよなあ。

そして俺はよりもよって、そいつに恋愛相談をしちまったわけだ。

俺は知らなかったとはいえ、なんて酷なことをしたのだろうか? 俺だって、上口さんが俺に恋愛相談してきたら、悲しいけど応援したくなっちゃうじゃん。 まあ、これはありえない例えだけど。

「とっとと出て行きなさいよ。いつまでも、泣き顔見てるんじゃないわよあ」

言葉は強気だが、声が弱弱い。 ったく、こんなやつおいていけるかっ!

「泣いてるやつを放っておけるかっての」

そういつて、抱きしめてみる。

普段なら投げられた後、マウントポジションを取られタコ殴りなのだが、今日はまあ…大丈夫だよな?

っていつか思いのほか体は柔らかい。 こんな体でなんで柔道なんかできるんだ?

ってそもそもなんでこんなんで俺より強いんだよ。

「同情なんてしないでよ……」

「馬鹿野郎。 泣いてるときにそんなこと言ってんじゃないよ」

一応、突き飛ばされてはいない。

まあ、抱き合っていると安心して安眠するよな？きつとそんな効果が働いていると思う。

俺は相手が男だったら絶対に嫌だけど。

っていつか茜も女なんだよなあ。そっか、俺が好きだったんだ…。それで俺はどうすればいいんだ？

答えの出ないで考えること約五分。

「もう、いいわよ」

といわれたので開放した。

体全体からぬくもりが消える。

冬という気温も手伝ってか、意外と喪失感が大きい。

「それで…なんかごめんな？」

「謝らないですよ。言ったはずよ。同情はいらさないわ」

「まあ、言われたけどなんというか…申し訳ないというか…」

「意外とあんたって優しいところあるよね。ホントに意外だけど」

「何をっ！このミスタジエントルマンに向かって『意外に』とはなんだ！」

「ミスタジェントルマンってネーミングセンスがありえない」

「うるせー」

そうやって、軽口を叩いてみる。

やっぱり俺たちはこうでない。シリアスな空気は似合わない。

「ありがとね。気がちよつと晴れたわ」

「ああ、なら良かったんだが」

「…それと、ごめんね。勝手に泣いたりして…。迷惑だったよね」

確かに100%迷惑じゃなかった、とはいえない。

しかし、泣かせたのは明らかに俺で、やっぱり悪いのは俺だ。謝るなど言われた手前、これ以上の謝罪は言えない。

「お互い様だ。お前も謝んな」

「ん、だね」

「……」

「いめん、言い忘れてたけど……」

「ん？」

「上口の居場所なんだけど、今朝に不良少女たちが『上口から金を巻き上げる』みたいなことを言ってたんだけど…」

「ま、まじかよ」

「多分、本当だと思う。だけど、部活で大抵の場所は人いるじゃん？だから、人のいないところ…」

「たとえば、3年の教室の前か。サンキュー」

3年の教室は元々囲碁部や将棋部が使っていた場所だが、3年生引退とともに人数が足りなくなり消滅した。

そして受験生は他の教室で補修を受けている。

だから、最近は3年の教室はもっぱら無人だ。見たことはねえかららしいに過ぎないが。

「気をつけてね。ヤクザの娘だって」

「……。行ってくる」

そう言い、3年の教室に向かっていった。

## 第五話 上口の試験、Rの覚悟

――2月13日 放課後 3年教室前――

向かう前に情報を整理しよう。

権力を持った女というのはものすごく強い。

なんせ、男は女に対しては暴力を振るえないのに対し、女は男に  
対して暴力や権力を使える。

まあ、それで今回はその権力を持った女が敵対するであろう敵だ。  
もし、暴力で解決するようなら上口さんに嫌われるだろうし、ヤ  
クザの娘が勝つ可能性も否定できないが俺が勝ったとしても、後日  
痛い目を見るだろう。

というわけで暴力ななしだ。

しかしといって、俺には後ろ盾がないから交渉もキツイ。

うちの親父はデスクワークで、お袋は教師だからなあ。

それで、俺、どうするよ？

その前にさ、上口さんとそのヤクザ娘が対談してるときに入った  
ら俺格好いいよ？

だけどさ、その前とかその後だったら、俺格好悪くね？

…まあ、結果的には前者なんだけどね。作戦なんて考えてねえよ。

「んじゃ、ありがとねえ」

「ばいばい」

「…」

ちよつと遅かったけど。

「お前ら、ちよつと待てよ」

「あん？」

「あんだよ」

「R君」

不良少女が睨んでくる。

その中に上口さんが入ってるのは何故だろうか？

「上口さんの金返せよ」

「はあ？」

「あたしらは金を借りたんだよ？今返したら意味ないっていうことがわかんないの？」

「いくらだ？」

「は？」

「いくらだ！」

「10万だけど、何？」

じゅ、10万だあ？

それはすでに高校生の扱っ額じゃねえだろ！

「さ、要は終わった？」

「あたしら行くところあるから早く通してよね」

「いいや、とお」

「あんどうさん」

「あん？ 上口も文句あんの？」

不良少女が背後の上口に振り向く。

しかし、上口さんは動じることもなく…

「あの、いそいでるんだったら、無視したほうがいいんじゃない？」

「それもそうね」

「さ、邪魔邪魔」

上口さんの言葉が終わると同時に不良少女達は俺の横をスルーする。

「だから俺の用」

「R君」

「な、何？」

そう言ってる間に不良少女達はいなくなってしまった。  
くそつ、作戦は失敗だったか！

「なんで、邪魔したの？」

「え？」

「私は、あの人達がお金に困ってるからお金を貸したの。友達として」

「だったら、こんなところでやんなくてもいいんじゃないかな？」

「人目のつくところで渡したら盗まれちゃうでしょ」

確かに、盗まれる可能性はある。

でも雰囲気的にも茜の言い方的にも脅されてるよなあ。  
打開できない。ハツタリをかまずぜ。

「一回目じゃないでしょ」

「いいえ、一回目よ」

即否定されたが、初っ端から10万を借りるやつも貸すやつもない。

「いや、ちゃんと写メで取ってるんだ」

「あるわけないね。今回が初めてなんだから」

むむ、意外と堅い。

もっと、軽やかにバラまいてくれないかなあ？

「しょうがないな。明日、広報部に提出して特報を作ってもらおうか」

「…その写メ見せてよ」

よし、食いついた。

「見せるわけないよ。見せた瞬間ケイタイを壊されたら意味無いからね」

「!?!」

予想外の回答だったらしい。

茜は口が回らないから口論の時はハツタリばかりだった。

まあ、たまには茜の真似も役に立つな。

「…あな…あなたもやっぱり…金が目的なのね…」

「は?」

「…告白も………割って入ったのも……」

「おいおい」

「いくら? いくらなら黙ってくれるの?」

「い、いや」

「私は…私は今の環境が気に入ってるのっ!壊したくない……」

「!?!」

それが上口さんの本音だった。

俺は何をやっているんだ?

好きな人に向かって脅しに見えるようなことをしたんだ？ましてや彼女はイメージ通り、弱くて、儂いのに！

「ゴメン。今の嘘」

「え？」

「いや、写メに取ったとかそういうの嘘だから泣かないでよ」

数秒、上口さんはポカン…として、突如殺気を含んで睨んでくる。ちよいなみだ目だから朝よりは威力ないけど、これほんと蛇睨みだよなあ。俺、蛙。

「あんだ、馬鹿？ 今、ネタばらししなきゃそのまま金を取れたのに」

「金？ そんなの興味ないよ」

「じゃ、何？」

「上口さんが好きだから、かな」

「！！ そこまでして私が欲しかったわけ？」

「いや、違う違う」

誤解を解こうとしてるのに、どんどん悪い方向に考えていく上口さんを見ると自然に笑いがこみ上げてくる。

上口さんはやっぱり弱い。だけどそれは予想以上だ。

やはり、イメージ通り猫みたいな女の子だ。  
さびしいのに、誰一人信用していない。だから味方にも牙を向ける。

「俺はこれをネタに上口さんと付き合いたいわけじゃない。  
俺はこの事実を突き詰めて、上口さんにこんなことをするあいつらを懲らしめたいだけなんだ」

「……」

「確かにさ、今ここで脅して上口さんと付き合うことは出来るかもしれない」

まあ、俺には脅すという発想すらなかったが。

「だけど、それは俺が望む付き合いじゃない。そこには一方的な愛しか存在しない。

やっぱり『付き合い』ってというのは愛し合ってこそ意味があるんだと思う。

金のためとか、そんなやつは死ねばいいと思う」

「……」

ここで俺は上口さんが金持ちだから付き合いわけじゃないことをアピール。

俺だって男の端くれとして上口さんが金持ちだろうが、奢らせないし。

まあ、俺は上口さんが金持ちだったのは今さっき知っただけ

な。いや、借金が出来るだけではないよな？

「私朝、私を好きって言わないで、って言わなかった？」

「ごめん、言った。上口さんが不快に思うならもうこれ以上言わない。

だけど、あと一回だけ言わせてほしい。

上口さん。俺は上口さんを見たときから好きだった。

付き合ってください」

今、ここで告白しないともうチャンスはないと思った。

だって、好きって言えないのにどうやって告白するっていうんだ。ここで何もしないでチャンスをなくすよりは、俺はだめでも何かをして終わりたい。

俺は何のために今日、徹夜した？

茜は何のために涙を流しながら俺を後押ししてくれた？

全部、この瞬間のためじゃねえか！

最後の最後まで粘る！

これが俺の基本プレイスタイル。

だから、野球だって9回裏2アウトだって諦めたことは一度もない。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………、本気？」

「本気だ」

「……………」

「……………」

「私、あなたを殺すって言ったら、あなた死ねる？」

「ああ、喜んで死のう。だけど、上口さんなら家族と幼馴染に遺言ぐらいは残させてくれるだろ？」

「……………」

「……………」

「どんなことがあっても私を信じてくれる？」

「信じる」

「…じゃあ、チャンスあげる」

「何？」

「今から、どんなことがあっても30秒間私を信じ続ける。簡単でしょ？」

「ああ」

「だけど、失敗したら死ぬわよ。それでもやる？」

今朝から出てくる 死 というキーワード。

彼女とは最も無縁そうな言葉だが、彼女から発せられる言葉は真に 死 を感じさせる。

「なんで上口さんは朝からそんな『死』なんて言葉を口にするの？」

「チャンスを成功させたら教えてあげる。っていうのは可哀想だからヒントだけ教えてあげる。」

私に一番似合う言葉だからよ」

死が一番似合う？

自殺をしようとしたのだろうか？

しかし、朝のシャーペンを投げたとき、場所は眉間という急所的に捉えていた。

いや、急所には入らないんだが、貫通するとしたら最重要部だから問題はないか。

となると、誰かを殺したのだろうか？

「誰？ 今出てきたら許してあげる」

「え？」

「なんで分かったの？」

俺の背後の曲がり角から出てきたのは茜だった。

「あ、茜てめえっ！ 人の告白現場見てんじゃねえよっ！」

「だって、気になるじゃん？」

さも当然のように言う茜。

数分前の出来事は夢だったのか、と思わせるほどの言動だ。

「この際、見てたのは別に構わないわ」

「俺構つよ？」

「つつさいR。話進まないじゃん」

「ええ。あなたこのまま見るのは続行してもいいけど、叫ばないで  
ね。

見る人によってはR18並のことするから」

「え？ 上口まさかアレやるの？ 上口だいたーん」

「アレ？」

「女の子から男の子に発せられるR18って言えばあれしかないでしょ。え・っ・ち」

「なっ」

ま、まじで？ いや、嬉しいんだけど嬉しくないというか…。  
いや、その行為自体は嬉しいよ？ だけど屋外な上、茜に見られながらって…。

「ちなみに、二人が考えてるのは逆だから」

「ですよね」

「いやあ、知ってたよ？」

「そんなの当たり前じゃん。俺、これでも常識人アルヨ？」

「さらにちなみに…」

「え？ 何？ きゃっ」

「っおい、茜！」

茜の足元のコンクリが溶けたようにへこんだと思ったら、茜の足を飲み込んでいる。

そして、瞬きをしたらそのコンクリートは固まっていた。茜の足を飲み込んだまま。

「小林さんは叫ばないで。叫んだら命の保障はできない」

「!?!」

ありえない。

コンクリが溶けて、茜の足を飲み込んで固まった？  
言動からして上口さんがやったのは明らかだ。  
しかし、方法は分からない。

「上口さん、いくらなんでもこれは」  
「覚悟はできた、R君？」

俺が口にする言葉をさえぎる上口さん。

「小林さんが命が助かる方法は簡単よ。口をふさいでればいいんだから。」

でもあなたは、私を口先だけじゃなく、私を信じなきゃいけないのよ？

他人を心配してる場合？」

「…、俺はまだ上口さんを愛するとか出来そうにない。  
まだ上口さんと接した時間は少ないから…。」

…だけど、俺は今でも上口さんが好きだし、信じてる」

ああ。これだってさっきは言っていなかったけど、試験なんだろう？  
だったら、最後まで信じきらないと。  
上口さんだって、好きでこんなことをしてるわけじゃない。  
そう瞳<sup>め</sup>が語っている。

「そう。 あなたの気持ちを試すわ」

そう言って上口さんがこちらに近づいてくる。

そして俺の背中に腕を回し、抱きしめる。

「えっ？」

反射的に上口さんの背中に腕を回す俺。

しかし、驚くのもつかの間。

俺と上口さんの足元のコンクリが溶けて、俺たちを飲み込みはじめる。

その瞬間、茜が何か言うとしたが俺が目で制した。

「今から、私たちはこの地面の中に入るわ」

そういつ頃にはコンクリはひざまで飲み込んでいた。

「息吸って」

言われたとおりに息を吸う。

「目をつぶって」

言われたとおりに目をつぶる。

ドボンッ

明らかに水に入る音がしてそこにいる2人は地上から姿を消した。

今、俺に唯一感じられるのは地面の冷たさと上口さんの体温。

上口さんは暖かくて、やわらかくて…。

そう考えるのもつかの間。

もぐらとかミミズとかいるのだろうか？

とか思ったり。

息が苦しくなり、少しだけ吐いた。

じいじい、と音を立てて地上へ向かう空気。

その空気はちゃんと地上に届いているのか？

なんてどうでもいいこと考える。

上口さんはなんでこんなことができるんだろうか？

俺が知る上口さんは頑張り屋で優しくてみんなのパシリで…。

これが上口さんの闇なのだろうか？

上口さんは 死 という言葉が自分に合っつていった。

自殺か他殺か、どちらかは知らないがどちらかをしようとしたの  
だろう。

上口さんがこの能力を使ってやるうと思っただのか？ それともや  
ってしまったのか？

少し足元が硬くなった気がした。

自分も上口さんを信じなかったらこのままここに沈められてしま  
うのだろうか？

足先からひざにかけて、石みたいなゴツゴツしたものがまとわり  
付く。

だけど、大丈夫だ。

上口さんは、ただ信じてくれればいい、とそういった。

だったら、上口さんは何もやるはずがない。俺は信じてるんだから。

上口さんはさびしがりやだ。

誰か一人くらい心の底から信じられる人がいたっていいじゃないか。

それが俺ならば、これほど嬉しいことはない。

だって俺は10ヶ月前から上口さんのことが好きだったんだから……

## 第六話 バレンタイン当日、三度目の正直

――2月14日 朝 グラウンド屋外プール――

「上口さん、俺と付き合ってください。お願いします」

「はい、こんな私でよければ、よろしくおねがいします」

よっしゃああああああキタアアアアアア。  
ついに、ついに上口さんが俺に応えてくれた。  
流石、古代の知恵の結晶、『三度目の正直』だぜ。

「そんなにうれしい？」

「え、俺顔に出てた？」

「うん。すつこく、うれしそうだよ」

すつげえええええ恥ずかしつ、俺。  
ちゃんと外に出さないようにしているが、10ヶ月の想いがやっと届いたことで頬が緩んでいたようだ。

「俺恥ずかし……」

「ううん、私もうれしいよ」

そう言って抱きついてくる。

昨日の反応とは雲泥の差だぜ。

昨日は30秒間地面に入った後、地上に帰還した。

地上に出た時、上口さんは茜を開放するのも忘れて（俺に抱きついたらまゝ）泣き出してしまった。

コンクリに足を開放されてない茜は涙目でこっちを見てたが、上口さんが泣いたのを見て、空気を読んで黙っていた。

『えぐ……朝……シャープン折って……ごめんなさい……』

『今はしゃべらなくていいよ。落ち着くまで待つから』

『うん……』

そうして、俺が背中と後頭部をなでること数十分……。泣き止んでもらった。

その間、茜がこっちを睨んでいたが、調子がハイになっているせいか、笑みを返してしまった。

…眉間にしわが盛大によった。『後で覚えてるコラ』って目が語っている。

殺られる。

っていうか今更だが、コイツ人のことサボリとかほざいてた割りには、お前もサボリだよな。

『あの』

『なに?』

『えと…、シャーペン折ってごめんなさい』

さっき言われたときもなんだけど、思い出したら悲しい気持ちグッとこみ上げてきた。

『ああ、うん、気にしてないから別にイイヨ』

『あとっ、シャーペン投げたのも！ 心配してくれたのに無駄にしたのも！ ひどいこと言ったのも！ …ごめんなさい』

『ああ、うん。俺はまあ、気にしてないからそれより、茜を開放してくれるとありがたいんだけど…』

さっきから、茜の殺気が痛い。

目で『てめえら、あたしの前でイチヤイチャしてんじゃねえよ』とか言ってる。

『いっ、ごめんなさい!』

そうやってまた地面が溶ける。  
茜より上の地面しか溶けていないのか、先のように沈むことなく  
地上に出てくる。

『にしてもさ、上口のそれって何？』

茜が足元を指差して言う…。

『えと、詳しくは話せないけど…、私の…ちからかな…』

『力？ 超能力みたいなの？』

『うん、そんなかんじ』

『へえ〜』

『それで人を殺したことがあるんだ』

その場の空気が凍りつく。

せつかく避けてた話題なのに…。

上口さんを見てみると、困惑の色が浮かんでいる。

『うん…。 だけどこれからは…』

『その目を見ればわかるから。 誰にも言わないであげる』

『……ありがとう』

「Rくん」

「何？」

「本当に私でいいの？ 化け物みたいな能力を持って、何人もの人を殺した私で…」

上口さんは未だに自分を卑下している。

確かに人殺しは大罪だ。 化け物染みた能力も怖くないとはいえないが…。

「俺は能力に関しては悪く使わなければいいと思う。  
それに俺だって間接的に言えば人殺しだ」

「え？」

「これは俺に限らず、他のやつにもいえることだが…。

俺がご飯を1杯食べただけで何人もの人が死ぬ。

それは食糧危機が生んだ悲劇だ。 いや、人口を増やしすぎた人類の報いかもな。

ガスや車を使えばある国は水没し、安く物を買えば会社や店がつぶれる。

俺たちは何か一つ行動を起こすたびに他人を殺している」

「でもそれは…」

「うん、確かにこれは上口さんも当てはまるし、上口さんはこれに上乗せになる。」

「ただ俺が言いたいのは…、皆は知らず知らずに人を殺してるから上口さんだけ気負うことはないってことなんだ」

「…ありがとう」

「そういつて抱きしめる力を強めてくる。」

「俺も応え、抱きしめる力を強くする。」

「くさいセリフだったが、気にするな。」

「それと、俺からあげるのもあれだけど、バレンタインプレゼントを用意してみた」

「ついに、ついにこのときが来た。」

「この瞬間こそ、おとといの徹夜が報われる。」

「ちょっと妄想の時は上口さんに『にやあ』とか言わせたり、鼻血を出したりしたが現実なら大丈夫だヨネ？」

「あ、わたしも…」

「ゴソゴソとカバンから取り出したのは二つの包み。」

「これが…バレンタインプレゼントで…、…こっちがその…代わり

のシャープペン…」

「ありがとう。でもシャープペンは別に良かったんだよ？」

「わたしがイヤだから…」

そう言って、うつむく上口さん。

「それじゃあ、ありがたく使わせてもらっよ」

「うん」

「じゃあ、俺からはこれを。包装してなくて悪いけど」

何人も万能にあらず、というように俺は裁縫は得意だが、ラップとか包装とか不得意。

そこ、俺が何も出来ないと言わない。

「ううん、うれしいよ。てぶくるっ？」

「うん、上口さんにあつと思って作ってみただけど…」

「ありがとう」

そう言って、装着する上口さん。

「どうっ？」



-  
完  
-

## 第七話 続、とある男女のバレンタインの日

「こうして世の中の変態がまた一人減った……」

「こ、小林さんっ」

倒れたRの後ろから姿を現したのは小林茜だ。  
見事にRの頭があったところに、足がある。

「R君が……、何するんですかっ！ R君に何かあったら許さない  
っ」

「大丈夫大丈夫。 日常茶飯事だから」

「日常茶飯事って……、毎日やってるってことですか？」

「だから、大丈夫でしょ。 まあ、上口と一緒に話したかったし。  
ほら、いちゃつくのはいくらでも出来るでしょ？」

「い、いちゃつくって……／＼／」

そういつて上口は照れる。

誰かと付き合うなんて考えもしなかったようで、ようやく実感が  
できたようだ。

そんな上口を見て、小林は真剣な表情をする。

「……上口」

「なに？」

「上口の過去を話してよ」

「……理由を聞いてもいい？」

「さっきはRもあんなこと言ったけど、お人よしのこいつは……上口のために昨日一生懸命考えたんだと思うよ。」

あたしがあんたを人殺しって言って、それでも上口を嫌いになれなくて、一生懸命考えたいいわけ。

でも、それもいつまで持つか分からない。

それは上口が一番分かってるんじゃない？」

「うん、分かってる。」

普通の人と人殺しが親しくするのは難しいのは……」

「あたしはね、あんた達に失敗して欲しくないんだよ。」

あたしを振ってまで、あんたを好きになったR達には……」

「え？」

「まあ、とにかく。あたしはあんた達に失敗はしてほしくない。」

でもあんた達は、いつ崩壊してもおかしくない。

だから、事情を知ってる人は必要じゃない？」

「……分かった」

そうして、上口は目をつぶる。

遠い過去を思い出してるその姿は、とても儂く見える。

「15年前のある大事件が起きたの、知ってる？」

「ん〜、15年前？ って2歳だし、知ってるわけないわよ」

「そうだよね、だから私は学校にすることができる。

その事件の名前は……『電腦誘拐事件』 って呼ばれてただけだね」

「電腦……誘拐事件。 誰かにさらわれたんだ」

「うん。 まあ体の自由は利かなかつただけで、不自由な思いはしなかつたわね」

「え……どうして？」

「それに答える前に確認しておくけど、他言無用でいいわね？」

「当たり前じゃない。 あたしがしゃべると思ってたんの？」

「そうじゃないけど……この話を無関係の人にしゃべるとある人達に消されるのよ」

「ある人？」

「それは後日話すけど……、絶対に話さないで。 私はあなたに死んで欲しくない」

「分かってるわ。 誰にも話さない」

「約束よ。それで話は戻るけど、15年前の事件はある一人の人間によって起こされた。」

被害者は……128人」

「128人？　そういえば、そのときの上口って2、3歳のはずだけど、どうしてそこまで知ってるの？」

「後で警察の公開情報と情報誌や掲示板を探ったからね。」

まあ、人数に関してはシードなしの7回戦トーナメントをやったから、2の7乗を計算しただけだけど」

「誘拐された人同士で何かのトーナメントをやったの？」

「そう、殺し合いのトーナメント」

「殺し合い……」

「要するに私は3歳児にして人殺しつてわけ。」

そのときは、ただ死ぬのが怖くて必死だったから、負けた人を考える余裕はなかったわ。」

そして3歳児でも大の大人に勝った理由は……」

「超能力があったからね」

「はずれてないわ。　だけど超能力を持ったのは私だけじゃなかったわ。」

師匠……私を救ってくれた人と、もう一人以外は全員超能力を持っていた」

「相手も超能力を持ってて、体や知能にハンデがあつてよく勝てたわね」

「いや、そこでは年齢による強さの違いはなかったわ。」

確かに体や知能にハンデがあつたのは事実だけど、あそこでものを言うのは超能力だけだった。

ある人に言わせると、超能力を使うには創造力と精神力が必要らしいの」

「創造力と精神力？」

「これは説明しづらいからたとえを使うけど、運動系のあなたに言わせれば、創造力は瞬発力、精神力は持久力。」

創造力は生まれた瞬間が最大で、この世の常識を知っていくことに失われていく。

精神力は生まれた瞬間が最小で、つらい思いを味わうことに追加されていく。

要するに超能力だけ関して言わせてもらえば私は、常識を知らなかったから瞬発力にすぐれ、家族から離れて知らない場所に放り出されるといつつらい思いを味わって持久力もそこそこある。

その説が合つてれば……だけど、まあ私もそこそこ強かつたから生き残れた。

合つてるかどうかは知らないけど、事実、年齢平均は20辺り、幼稚園児以下は3人も生き残れた」

「だけど……、そこまで強い人が100人以上いるなら、とつと逃げ出せばよかつたじゃない。」

それとも犯人は100人以上で立ち向かっても敵わない相手なの？」

「流石に超強い犯人でも、被害者側にも超天才は3人ぐらいいたし、全員で立ち向かえば何とか勝ったかもしれない。

でも勝っても意味ないのよ。」

何せ戦ったのはゲームの中だったんだから」

「どづいつこと?」

「ここで保留してた質問に戻るけど、私達が戦ったのは電腦世界、いわばゲームの世界だった。

でも、単なるテレビゲームじゃなくて、ヴァーチャルゲームだったことが問題ね」

「ヴァーチャルゲームって五感体感型ゲームのことよね。」

それつと10年後には実用化されるだろうっていうあのゲームのことよね?」

「そう、そのゲーム」

「でもあれは、現代の技術じゃ作るのとは不可能って言われてるじゃない。」

10年後ですら、完成するかどうかも怪しいのに……」

「でもそれを15年前に作った大天才、或いは大馬鹿者がいた。」

そのおかげで、首をはねられても特定の場所で復活できるのよね。」

まあそのゲームが接続されているせいで、ヴァーチャル世界でどんなに体を動かしたって動くのは心臓と脳だけなのよ。」

そのときの現実の被害者は、血流を滞らせない機械や栄養を入れるチューブとか諸々（もろもろ）つながれて横たわる人形だったのよ」

「じゃあ、いくらゲームで勝負をしかけても、犯人はゲームを抜け出して、現実の動けない人間に刃物を振り下ろすだけで済むのね。」

しかも、犯人は殺されても、ゲームの中は死なない、か」

「そう。それが私が人殺しになった半分の理由」

「まだ、あるのか」

「ええ。結局、電腦誘拐事件は上位16位の人間は解放された。だけどね、なぜかゲームの中でしか使えなかった超能力が、現実でも使えるようになった。」

心に傷を残し、常識を知らなかった私は、時折能力を使って憂さ晴らしをたまにしていた」

「どんなことをしたの？」

「流石に人殺しはしなかったわ。周りの人間をみていると人殺しは間違いないんだって気づいたから。だけど、子供って残酷なのかな。幼稚園に入った時、私と同じ組の男の子とか、平気で虫を殺していた。」

そして親も決して止めない。

私は真似をして虫とか殺してた。

ありを地下100mに埋めたり、いもむしを地下200mに埋めたり、蜂の巣を地下500mに埋めたり」

「……埋めてばかりだね」

「まあね。地下は私の本領というか、土の中なら私の実力が発揮

できるというか。

そうやってたまたまに暴力にものを言わせて小者を虐めてると、まあだんだんそれを見かける人が増えるのよね。

人目を気にしたり、周りの人もそういうことをやる人が少なくなつたから、私もあまりやらなかった。

それでも馬鹿にされたり、喧嘩したり、いじめられたり。

そのたびに小者を虐める。

それで小学5年生の時、うちの家族がとうとう気づいちゃったのよね、私の能力を」

「家族……。そういえば、上口は一人暮らしだったけ？」

「まあね。父と母と姉がいたわ。全員殺したけど」

「……………」

「まあ、普通は絶句するよね。家族を殺して何も感じないなんて人としてどうかしてる。

話は戻すけど、私の能力を気づいた家族は気味悪いと感じるよりも先に、金儲けを思いついた。

だって、娘、妹の私は愛した家族にこの力を使うことはありえなかったから。

そして、私は金儲けに使われ始めた。

最初は……。そうね、建物の取り壊しが主だったかな？  
いらなくなつた家を地面に埋める。

そうすると、機械を使わないから費用も日数もかからない、地面が圧縮されて安定し新しい家が建てやすい。

だけど、その仕事も有限。その仕事が終われば今度は  
は畑仕事。

地下を意のままに操れる私は、土を耕すのも、水分をいきわたら

せるのも、微生物を偏らないようにするのも簡単だった。

一日に1個は片付けて、やがてその仕事も尽きた」

「それだけお金が稼げれば、十分だったんじゃない？」

だって家を取り壊すのって、取り壊す機械もそうだけど、残骸を運ぶのも埋めるのも他の機械を使うし、

畑に関してだってトラクターとか年間数百万もとるんだから、上口がそれぐらいもらってるとして、仕事を終わらせたなら何億も稼いでるんじゃない？」

「実際の私は学校を通いつつ、仕事をやらなければいけなかった。

土日は別として、平日は2時間ぐらいで言って帰れる場所でなければ、出来なかった。

とはいっても交通機関が発達してるし、隣県ぐらいはいけた。

私が転校を渋ったから、仕事の範囲は増やしようがない。

建物を壊す仕事は1回200万、畑仕事は120万。仕事の数は両方あわせて半年で終わったから、合計180件。

平均をとって、160万を180でかければ、2億は超えるね」

「だったら、仕事がなくなっただって困らないんじゃない。

上口の親父さんだって、仕事はしてんでしょ？」

「本当に、それで満足すればよかつたんだよね。

でも人間というのは愚かで、一度欲を満たされる快感を知ってしまつとやめられないもの。

だから、また仕事を探した」

「今度は何をしたの？」

「平日は工場の廃棄物の埋め立て、休日は鉾山で鉾石の発掘。

工場の廃棄物は毎日出るからなくなる心配はないし、日本は鉱石があまり取れないから、注目されてなかったけど、少量なら取れる」

「じゃあ、問題は無かったんじゃ？」

「いいえ。」

廃棄物を処理する場所は工場から遠いことがほとんどだった。

いくら私が地下でのコントロールが高くても何トンもの物体を何十キロ離れた場所に持っていくのはできない。

それで従来通り、大型車を往復させて廃棄物を運び、私が埋め立てるという配置になった。

だから給料は大半は大型車のレンタル料と運転手に割り振られ、その仕事は給料1日に5万。

父よりも給料は良かったけど、それでも以前の私に比べれば少ない。

鉱石探しも始めのうちは何千万というお金が入ってきたけど、一月で全ての鉱山の鉱石が掘り返され尽くされた。

鉱石がとれなくなって、工場の仕事も給料が満足できなくて、新たな仕事を探した」

「次は何を……？」

「今までやってた小者虐めを、人間相手に」

「っ……！」

「流石にこれは1日1件とはいかないけどね。」

それでも1回の仕事で何千万も取れる。

しかも、人間は人間の数だけうらみがある。1億の人間が生きていけば、1億の殺したい対象が。

よって仕事は尽きることはない。

しかも地下100mも埋めれば、警察に気づかれることはない。  
こうして私の家は『永遠の大富豪』という称号をもらった」

「『永遠の大富豪』？ それってまさか大富豪、吉田よしだ 克？」

「そう、私の本来の名前は吉田 奈央、が正しいわね」

「生きてたんだ……」

「まあね。 世間では全員行方不明だからね。」

私が家族を地中に埋めて、私自身は国籍を変えたただけなんだけど、とにかく、私はそのときぐらいに、家族に利用されていることに気づいた。

もっと早くに気づいても良かったんだけどね。

子供は親に慈愛を与えてくれるを信じて疑わないし、周りの人も私達がどうなってるか気づいていない。

でも、気づいたところで私の生活は変わらない。

私を利用されていることに気づいても、親は慈愛ではないけど愛をくれる。

しかも私が家を出ても、社会的には生きていけない。

だから、約2年半もの間、私は人殺しをしてた」

「……つらかったの？」

「それは最初だけ。 どんなにつらいことも人間はいずれ慣れる。

だけどその生活は突然変わった。

私に対するいじめグループに友達が加わった。

裏切られた、と理解した時、殺したくなっただけで必死に我慢した。父に外でその超能力を使うなって言われてたから。」

必死に、必死に我慢して家に辿りついた時、家族に泣きついた。そして言われたのが、

『邪魔だ。父さんは仕事なんだ』『うるさいわね、あっち行ってなさい』『うざい、どっかいって』『ってね』

「……………つそんな……………」

「ひどいよね、散々私を利用してたくせに、私が助けを求めたらほっておかれるんだよ？」

今の私だったら、何とかこらえられたかもしれないけど、あの時の私には我慢できなかった。

ただでさえ、友達に裏切られたのに、家族に裏切られるなんて。

そうして、その日、私は家族を全員殺した。

でも今思うと、悪かったのは私なんだよね。

力を使ってなければ親に気づかれず、ずっと慈愛だけを向けてくれた。

親に気づかれても、使わなければ殺すこともなかった。

結局、自分のせいだったのに自分は子供だったといいわけして、責任を他人に押し付けただけなんだよね」

「……………上口が悪くなかったとは言わない。

だけど、自分を責めるな。周りの人間も悪かったし、上口も今は反省している」

「ありがと。そう言ってくれる人がいるだけでも、私は救われる。

後は親のお金を……………まあ私が稼いだお金を持って家を飛び出し、転校して、進学して、後は知ってる通り。

人と話したくてクラスで明るく振舞って人と接するも、裏切られるのが怖くて親友は作れない私」

「そうか……。  
なあ、さつきから思ってたんだが、今の上口と普段の上口が違っ  
て見えるんだが……」

「まあ、二重人格みたいなものかな」

「今の上口と普段の上口、どっちが本当の上口だ？」

「どっちも本当の上口さん、って言えばいいんだけどね。

普段の上口さんが本物かな。

優しくて、頑張り屋で、頼みごとは断れなくて、かわいい上口さ  
ん。

今の私はね、そんな上口さんが耐えられない場面、例えば人殺し  
だとか、誰かに裏切られたとか、その記憶を話す時とか、そんな時  
に現れる第二人格。

世間つてのは、甘い上口さんが普通に生き残れるほど優しくない  
んだよね。

そんな上口さんを守るのが私ってわけ。

でも、本当のことを言えば、私なんかいなくても生きていける世  
の中だったらいいんだけどね」

「そんなことを言うな。

例え、不本意に生まれてきたとしても、せつかく生まれたんだか  
ら楽しめ。

私は二重人格じゃないからいえることかもしれないけど、お前だ  
って上口だ」

「そう……、ありがとう。

でもそろそろ、戻らないわけにはいかないよ。

急に私が変わったら、クラスの人もR君もビックリするから」

「そうか。 Rには二重人格のこと話さないんだな？」

「隠したい……………じゃだめかな？」

「いいと思う。 もしバレたとしても、混乱しないよう協力する」

「そう、ありがとう」

「あと最後に聞くが……………、中学の時の親友はどうした？」

「……………知らない、けど、高校には入ったと思う」

「その親友はきつと後悔してると思うぞ。」

「多分、いじめの経緯はいじめグループに脅されて、それに抗う勇気がなかったんだろう。」

「多勢に無勢だ。友情、勇気どころの問題じゃない。」

「そいつは許してやれ」

「分かってる……………。 でも今更、何をすればいいと言うの？」

「会って来い。 謝らせて、そして許してやると言ってやれ。」

「1人が嫌なら、私とRもついていく」

「……………うん、分かったよ。 ありがとう」

「いや、分かってるならいいよ。」

「そろそろ時間がやばいな。 早くRを起こして教室に行かないと遅刻になる。」

人格を戻すなら今のうちだ」

「うん、もうだいじょうぶ」

「人格戻るの早いな。今の記憶はあるのか？」

「うん、いちおう……頭も体も共有してるから……」

「おいおい、それで今の上口への精神的ダメージは大丈夫なのか？  
まあ、それはまた次の機会に聞くとして……」

おい、起きろR。  
起きろ！」

「R君……、遅刻しちゃうよ……」

「……………」

「上口、離れてろ」

「え？」

「いいから」

「う、うん。乱暴はだめだよ？」

「仕方がない。  
おい、竜崎りゅうさき 或人あいつと。即刻起きなければ、貴様を半殺しの刑に処す」

「はっ、ただいまっ！……」

「わっ、びっくりしたあ……。 R君、いこっ？」

「え、うん。 あれ？ こごごご？」

「竜崎 或人。 模索はどうでもいい。 3秒以内に出発できなければ、貴様を半殺しの刑に処す」

「はっ、ただいまっ！！！」

「よし、上口行くぞ。 HRに遅れる」

「う、うん。 Rくん、いこっか」

「ああ。 俺って結局なんでここに寝てたんだ？」

・ 本先に完 ・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8214g/>

---

ファンタジーワールド番外編 - とある男女のバレンタインな日 -

2010年10月28日06時57分発行